

ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる（1）<sup>1)</sup>

——「沖縄のらい者の父」青木恵哉——

阿部 安成

「ハンセン病をめぐる療養所を訪う、知る、報せる(2)——「人気俳優」と「社会社説担当」

Working Paper Series、滋賀大学経済学部、2020年4月予定

「ハンセン病をめぐる療養所を訪う、知る、報せる(3完)——「おひい様と呼ばれ」た井伊文子」

『彦根論叢』第424号、2020年7月予定

本稿見出し はじめに／「沖縄のらい者の父」／知っているかと問われるひと／その適否が問われる記述／「神学者」／問われる「神学者」の審判／問われる青木恵哉の報せ方／おわりに  
かえて

**はじめに** 彦根在住の名士だった井伊文子が、ハンセン病施設に暮らす人びとと交流を結んでいたことは、あまり知られていない（本シリーズ(3完)を参照）。彼女が執筆した稿「一隅を照らすもの」によると、その手許に「H氏病療養所岡山光明園の「楓」という雑誌」が毎月送られてきたという（同『仏桑花燃ゆ』灯影舎、1972年、所収、初出「昭和四十二年十月 産経新聞」。同書は2020年2月27日に同僚の青柳周一からの教示により知った）。これは正確には、現在は岡山県瀬戸内市が在所の国立療養所邑久光明園内で編集発行

<sup>1)</sup> 本稿は2019年度科学研究費助成事業基盤研究(B)(一般)「近現代日本における病者・療養者の生」（研究代表者一橋大学大学院社会学研究科石居人也）と同年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「隔離のなかでの生をめぐる歴史表象—ハンセン病療養所をフィールドとして」（申請者阿部安成）による成果のひとつである。当初本稿は「ハンセン病をめぐる療養所を訪う、知る、報せる—2020年2月、3月雑感」と題し本Working Paper Seriesの1編として発表する予定で執筆していたところ、400字×100枚をこえたため分割発表することとした。分割稿の発表予定については前記のとおり。

された逐次刊行物を指す。井伊は同誌に載った「その声の立ちくる方へ」と題された稿を読み、そこに記された「癩を病む七十才余のAさんという老人の話」に目をとめた。そのひとが暮らす「沖縄の愛楽園の機関紙も貰っているし、二・三の人とも文通しているがついぞ知らなかった。Aさんと名が伏せてあるということもあるけど……」と、井伊には未知のひとだった「Aさん」は、その「努力によって現在の愛楽園の敷き地が確保され、基礎がおかれた」と評される人物とのこと。同稿で井伊は同人の伝道などにふれ、「紙数に限りがあってこの程度の紹介しか出来ないが、私はこれを読んで、とにかく表面的には絶望的なことの多い世間において、このAさんのように黙々とあらゆる分野で不幸な人の為に祈り、かつ働いておられる方々のあることに思い及び、深い感動を覚えずにはいられない」とその心情をあらわして彼を讃えた。

井伊はこの稿を自著に収載するにあたって「附記」をくわえ、そこで「A氏とは青木恵哉氏のことであり、沖縄救癩の先駆者であった。はからずも昭和四十六年六月九日愛楽園を訪問し、氏の頌徳碑建立趣意書を貰い、その業績と高德なる人格を識ったのだった。／昭和四十四年、七十六才で天に召された」と、そのひとの名と評価と享年とを報せた。井伊は、青木が亡くなる2年まえに「Aさん」として彼について書き、没後2年のときに彼が暮らした療養所を訪ねたのだった。彼女は青木に会わず仕舞となった。

わたしは、調査と研究のフィールドとしていた国立療養所大島青松園（香川県高松市）で青木恵哉にかかわる文書や写真を手にし、また、彼がその「基礎」をおいたという現国立療養所沖縄愛楽園（沖縄県名護市）でも彼を撮った写真などをみることができ、それらをとおして知ったことをふまえて、彼の著作といわれてきた『選ばれた島』のリプリント版を刊行し（阿部、石居人也監修、解説『選ばれた島』リプリント・ハンセン病療養所シリーズ1、近現代資料刊行会、2015年）、同リプリント版の発刊を記念したシンポジウムを開き（沖縄愛楽園自治会主催、2016年3月6日、国立療養所沖縄愛楽園交流会館）、また、同シンポジウムの成果を論集としてまとめつつあるいま、あらためて、青木恵哉のなにを知り得るのか、彼はどう報せられているのかを確かめることとした。

**「沖縄のらい者の父」** 井伊文子が目をとめた「その声の立ちくる方へ」と題された稿

は、国立療養所邑久光明園内の邑久光明園慰安会が発行所である逐次刊行物『楓』通巻第322号（1967年9月）の「ずいひつ／<sup>〔マ マ〕</sup>四人集」と題されたページに載る。橘美代志がその「四人集」のひとり。

橘の稿は、「私たちの人生において日々織りなされる邂逅と別離くらい不思議なものはない。まして、もうこれきり会えるとは思われないという人とのしばらくのまどいと別れくらい心に止まり、且つ尊いものはないだろう。／そういう別れを、つい先日、私はAさんとの間にかわした」と始まり、その「Aさん」を描写してゆく――

Aさん、彼は今年七十才の中ばに達した徳島県出身のらい病む一老人である。身体はこの年代の人にしては大きく、その頭髪はさすがに白い。その顔には病からきた麻痺があって口がやや開きかけており、笑っても表情が出ない。とはいえ、その顔全体から受ける印象は「いかつい」といった言葉がぴったりして、おかしがたい力がその眉根のあたりや目の奥に漂っている。首はがっちりとして細くなく太くなくこの頭を支え、肩は、この年になっても若い頃の労苦を偲ばせるに十分な程に今でもしっかりと張っている。しかし更によく見れば、その両手の指は殆どが一、二の関節を失っており、おまけに片足は義足である。――このように描写してゆくと、療園にはどこにでもいる老人のように思われるであろう。その通り、Aさんはごく平凡な、涙もろい一老人であるに過ぎない。／ところがジャーナリズムは彼のことを「沖縄のらい者の父」とか、「沖縄の聖者」とか呼んでいる。なぜなら、彼はその生涯を沖縄の同病者のために尽し、同病者と共に歩んできたのであり、現在の沖縄愛楽園はこのAさんによってその敷地が確保され、基礎が置かれたのだったからである。／「いやいや、そんなことはないよ。わしは失敗ばかり多い人間でな、今でもあっちに行くと『タンメー、フリムン』（おじいさんの<sup>〔甲斐性〕</sup>かいしよなし）と言われ、みんなからからかわれとるんよ……。」とAさんは決して自らを誇らない。それどころか四十余年に亘る沖縄での彼を支えてきたものは、「人を己に勝れりと為よ」という聖書の言葉であり、自分のなすことは全て未完成であり取るに足りない。しかし、神は世の終末の日までに必ずこれを完成して下さるという確信であったという。

――執筆者の橘について、わたしはよく知らない。わかるかぎり記すと、同人は、1953

年2月に白内障の手術をうけて、「それまでの数年間使用した盲杖と昼間だけは縁をきる  
ことが出来」、その年の11月に「盲人会が結成されるに及んで私は全く自分が蘇生してい  
くような日々を経験しました。一点字の勉強、多くの方々との文通。そして生活改善のた  
めの協議—〔中略—引用者による。以下同〕そして今日、私の眼は以前にもまして私  
を助けてくれるようになりました。ですから私は一応盲人会より退会することに決心した」  
在園者だった（橘美代志「盲人会より退会して」『白杖』第33号、邑久光明園盲人会、1963  
年3月）。

やがて盲人会を退会する橘は、かつて、「盲人」をふりかえる省察をおこなっていた（同  
「受くる前に与ふる物を」同前第4号、邑久光明園杖の友会、1955年9月）。

盲人とは実に観念にとりつかれやすい立場にいるものとも言える。まして病院生活を続  
けている我々は驚くほど自分よがりになり、理屈が多くなり、実行力が減退し、意欲を  
失ってしまうものである。我々はよく耳にするし、また自身無意識のうちに「ライ盲者  
の苦痛、すなわち感覚の麻痺した者の惨めさはどうてい世人にはわかるまい」と言う。  
しかしこれこそが、非社会人たることを自覚するこの言葉こそが、我々の進歩を阻んで  
我々を愚かなものとしていると思われる。これは点字習得の一事をもってしても如実に  
証明される。／我々は今一度、自己の生きている価値について考えてみなければならない。  
もし単なる慰めでしかないならば、いかに舌端で読む点字も価値のないものである。  
せっかく奏でる音楽も空虚な時間つぶしに終って、後の静けさはいっそう寂しくなるで  
あろう。

とかえりみながら、どういった展望を示すか——

ではいったい何が我々を価値づけ、世間の人々と対等の立場に立たしめるのか。／私は  
いわゆる無学と言われる人々の中に貴いものを見出すことがあるし、物識りと言われる  
人々の中に哀れな人間の姿を見ることがある。人の価値はなるほど健康にあり、地位に  
あり、財産にあり、名誉にあり、学歴にあり、経験にあるとも言えよう。しかしさらに  
高い価値は神を信ずるところにあり、そこから生まれる意志にあると言わざるを得ない。  
我々が一般社会の盲人とつながり、一社会人としての価値を得る前に、我々はまずもっ  
て自己の存在に聡いものとならなければならない。

——ひとまず、価値相対化というところに立ってしまうと、これは無限にどこまでも相対化せざるを得ない隘路または落とし穴に陥ってしまう、ともいえる。それを回避するために、橘はみずからの信仰を梃子として、「自己の存在に聡いものとならなければならない」と説くのだった——「我々は色々なものを世の人々に乞う前に、我々自身が自己の価値に聡くなって世の人々に与えるものの、あるいは示し得るもののひとつくらいはあってもいいと思う」とは、じつにささやかな提言ではある。「自己の存在に聡くあれ、とは、「我々自身が自己の価値に聡く」あることであり、そうして「世の人々に与えるものの、あるいは示し得るもの」が「ひとつくらいはあってもいい」というのだから。こうして、「我々の当面の最大の問題、すなわち偏見と侮辱、その他の問題は自ずから解決されるであろう」との展望が示されたのである。

「偏見と侮辱」という他者が生じさせ、そしてそれを理不尽にも、うけたこちらが解決すべき事案となるばあいがあるそれを、伝染という他者との関係性により隔離されたものたちが、みずからをかえりみるところから変えようとする姿勢は、それは療養所内で噛みしめなければならない諦めか、療養所内で飼い慣らされたゆえのその証なのだともみるむきもあろう。わたしはしかし、このように説く橘に、わが身をとらえ直すその意思をみようとおもう。橘は、『白杖』や『楓』に多数の稿を寄せていたので、そこからたどられるその心性のありようを深く知りたい在園者ではあるが、それはまたべつの機会として、ここでは彼が描写した「Aさん」の像を見遣るとしよう。

それというのも、この「Aさん」=青木恵哉は、さきにみた井伊文子の著書に追記されていたとおり、1969年に亡くなる。さきにみた橘の『楓』への寄稿が1967年。そこに記された、「つい先日」という橘と青木との「邂逅と別離」がいつのことかわからないものの、「彼は今年七十才の中ば」というのだから、それは青木の最晩年のことにちがいない。さらに橘はその稿の末尾に、「七月中ばのあの暑い日、最後に残された使命として、沖縄に骨を埋めるべくAさんが旅立って行かれてから既に十日」と記したのだから、青木が沖縄に帰ってから旬日のときに橘は稿を書いていたのだった。その時期の青木のようなすを報せる記録が少なく、橘の記すところは青木の稀有な描写なのである。掲載誌の『楓』を閲覧する機会是一般にかぎられているので、史料紹介としてここに引用しよう。

「それでよ、いよいよ療養所が出来たのは昭和十二年の五月でな、その時はみんなとても喜んでな。これには沖縄 MTL や三井報恩会、それにまあ随分と多くの人々のおかげがあったんだけどよ……」。孫たちにその嗣業を授けてもするかのように老人はゆっくりゆっくりと話をした。彼の目には遠い日の苦闘の数々がありありと去来しているようであった。／「しかしな……」と言って急に言葉がとぎれた。見れば胸には早くも熱いものがこみ上げてきている様子であった。「しかしな、療養所建設の本当の貢献者は、あのガマ（岩の穴）の中や墓場や、阿旦の木の下で、一日も早く安住の地を与えて下さいと一心にいのちをつとめたあの病者なんです。中には随分と病気が悪くて、一寸見るとこわいような人も何人かおってな、しかし、そうした人たちが毎日毎日、そりやあ熱心に純真に、みんな涙を流しながらいのちをつとめてな、そのいのりがきかれたんです。わしはそう信じています。名も知られん、また、何人かは療養所が出来るまでに死んでいった、あの病友たちのいのち、あの病者たちこそ隠れた最大の功労者ですよ」

と、青木の言が「 」をつけて記されている。

それをうけて、橘は――

私がもし、ジャーナリズムと共に A さんを「沖縄のらい者の父」と呼ぶとするならば、この一言を信仰告白のように語る A さんに対してである。そこには A さんの人格がかおっている。彼がいかに真摯な人であり、病む者の心を知り、心を受け得るハートを持っていたかはこの一語の中に見出される。しかもここには A さんに導かれながらひたすらに病を生き、いや、いのちある身のかなしさと慰めとを味わい尽した人々の生の実存というもののまでもがいみじくも開示されているのである。

と、癩そしてハンセン病をめぐる療養所を生き延びた人びとの生を説く言葉を得たのである。彼は信仰にも言を継ぐ――「らい病む者にとって、一日生きのびることが深いあわれでなくてなんであろう。しかもそこで、彼らは己がいのちを神へと投げかけて祈ってきたのだ。彼らにきかぬ神があり、彼らに答えぬ神があろうか。いやいや、こういう者のいのちとこういう者の生に対してこそ神は語り出したもうに違いない」と書きとどめれば、これは、信心あるものゆえの生への姿勢とみられるかもしれない。彼はさらに書く――「いったいに祈りとは神への求めであると共に、むしろ、神より己が人生に対することばを聞くこと

であるといわれる。だから、まことの祈りとは己が欲求に生きることではなく神よりの求めを己が人生のうちに見出して生きぬくことだという言葉は正しい——とはさきにみた橘の、「自己の存在に聡」くあれ、との宣にもつうずるといえよう。

橘美代志が青木恵哉を描写した稿が『楓』に掲載されたときと同時期の『愛楽』誌（沖縄愛楽園入園者自治会編集、沖縄ハンセン氏病予防協会発行）をみると、同誌第28号（1965年12月）の「春季文芸【一九六五】／俳句／矢野野暮選」に「入選」した、「踏青<sup>（とうせい）</sup>や足袋し義足の試歩<sup>（しほ）</sup>そろ／七十路の吾の童心下萌に／囀りや島には島の訛り出す／蝸牛這う祈一つに身を委ね」が青木の作である。これに選評がつく——

どの句もなかなかの逸品だ。義足にはかせた足袋に、踏青に出た心のはずみがウマク生き、七十路の人の童心もおもしろい。鳥とか花の名まえは、子どもがつけたあだ名がもとだとか、そのものズバリに特徴をとらえているからだろう。訛りというものは、子どもときのそれらへの呼び名などによく引き出される。うれしいからである。「でで虫」の句も、その生態を写しただけにおわつていないものを感じさせる。立派である。

ついで、同誌次号第29号（1966年12月）の「一九六六年春季懸賞文芸」「俳句／矢野野暮選」では、青木の句は「佳作」——「木の芽吹く天地の諸事は祈りより」。同誌第30号（1967年6月）「一九六七年／春季文芸」「俳句／矢野野暮選」でもおなじく「佳作」——「忘れんぼの渾名で通り老の春」。これはみずからを詠んだ一句か。

同誌第32号（1968年7月）掲載の、「1968年春季文芸／入選作品」における「俳句／矢野野暮選」で、青木の作は「一席」をとった——

菜の花や盲爆被爆の傷の痕／非戦デモ都心ゆさぶり山笑う／核抱く平和のたうち下萌ゆる

その選評はというと、「第一句は沖縄戦当時の実体験に想を発しているようにうけとつた。第二、第三句はもちろん今の島の現実をふまえての作品。どれも戦争につながるテーマで、それにかからませた季語季感のたしかさが、俳句にまで仕立てあげている。／それだけでなくさえむづかしい素材を生かしていて妙」（傍点は引用者による）。晩年の青木は、その俳句に「沖縄戦」という過去と「今の島の現実」とを、痕跡や示威行動や脅威をもたらす造物で

つないで詠み<sup>2)</sup>、そうした「むづかしい素材を生かして」「俳句にまで仕立てあげている」と評価された。この3句が『愛楽』誌上の青木の遺句となった。

そのつぎの同誌第33号(1969年9月)は、「青木恵哉師追悼集」として組まれた。「遺詠十句」が載る——「越えて来て骨を埋むる一葉かな／同姓の一人も居なく園の秋／鷹渡る島永住の地と定め／踏青や十万坪の別天地／祈りだけ天職として祈る秋／地の上に癩なき彼の日夢の春／三十年の足跡消えず落葉路／核抱く平和のたうち下萌ゆる／菜の花や盲爆被爆の傷の痕／文枕の貝の背光り秋灯下」。そのあとに載る、沖縄らい予防協会理事長上原信雄の弔辞「青木恵哉氏の御霊に捧ぐ」では、「越えて来て骨を埋むる一葉かな」の句に「あなたにぴったりの名句でした」との賛が寄せられ、そして、「沖縄救ライの先駆者、愛楽園の基礎石、病友の大指導者」とその軌跡が讃えられた。

表紙に「一九七一年十一月十日」の日付が記載された小冊子、『青木恵哉遺句集／一葉(ひとは)』(青木恵哉頌徳碑建立期成会)がある。表紙に記されたその月日は、たとえば前掲『愛楽』第33号裏表紙の「愛楽園案内」にみえる同園「創立」の日付である。同書巻頭には、矢野野暮による「詞書」があり、そこに彼が「恵哉さんの踏青三句と、名付け」た——「踏青や賜びし義足の試歩そろ／踏青や十万坪の別天地／踏青や慣れし義足の音はずみ」が載る。第1句が、さきにみた『愛楽』掲載のそれと異なる。選評に「義足にはかせた足袋に」云々とあったのだから、その掲載句は確かに「足袋し」だったが、のちにあらためて「賜びし」としたか。

4名の病友とならんで、義足をはずした足を組む青木を撮った写真がある(ハンセン病問題ネットワーク沖縄編『入門沖縄のハンセン病問題 つくられた壁を越えて』なんよう文庫、2009年)。

---

<sup>2)</sup> 当時の沖縄における核についてたとえば『朝日新聞』は、1962年5月8日夕刊「「沖縄の核武装」で衝撃」の見出しで「池田首相、小坂外相が沖縄の核武装を認め「施政権がないので日本に責任はない」と述べたことは、現地米軍が公式には明らかにしていなかった事実だけに、現地に衝撃を与えている〔中略〕沖縄の世論も常識的には核武装されているものと信じているが、米側から公式の言明がないので、これまで当らずさわらずの態度をとって来た。それだけに日本側から明るみに出されたことはショック」と報じ、同紙同月24日夕刊第1面に「核武装反対を決議／沖縄市町村会」の見出しを掲げ、同紙同月30日夕刊「ニュースの目」欄に「初公開された沖縄の核兵器」の見出しのもとに「沖縄の米軍は、このほど三軍記念日に、核弾頭可能の兵器を初めて一般に公開した」と記した。こうした記事を青木が読んでいたか。

青木の遺句集をおさめた小冊子は、「新年の部」「春の部」「夏の部」「秋の部」「冬の部」に分けられて、68句を載せる。さきにみた、「青木恵哉師追悼集」として編まれた『愛楽』誌掲載の「遺詠十句」にあった、「祈りだけ天職として祈る秋」「地の上に癩なき彼の日夢の春」「菜の花や盲爆被爆の傷の痕」の3句が同書にみえない。また、「核抱く平和のたうち下萌ゆる」の句は、「核抱いてのたうつ平和下萌ゆる」と変えられている。この句とさきの3句の最終句は、どちらもその「妙」が讃えられて1席となった秀句であるがゆえに、没後に刊行された遺句集で、それらが収められなかったり変えられたりしたことを、青木の遺志かと訝しくおもう。おなじく1席の「非戦デモ都心ゆさぶり山笑う」は「遺詠十句」になく、「遺句集」にはある。沖縄の戦争と戦後を語った青木の言辭を、もっといえば、戦後に青木が語った戦争と基地を、これまでわたしは知らなかっただけに、さきの1席入選の3句は、療養所開園後の青木を、しかも最晩年の彼を知るうえで不可欠にして重要な痕跡なのである。

最晩年の青木について、彼が生きた沖縄は屋我地島で編集発行された逐次刊行物誌上の数句と、そこから直線距離でも千キロメートル以上は離れた瀬戸内海の長島に残る逐次刊行物に載った記事から、それをあらためていま、知ることとなった。前者において青木は俳句を、ただ季節を詠むだけの老人の手慰みにはせずに、沖縄を、現時の、自分が、生きる場としてとらえ、そこにあるどうにも理不尽な事態を突く匕首としたと喩えよう。そして彼はまた後者をとおして、忍従でも諦念でもない、自分たちが生きる場をあらたにつくりあげる——それを成し遂げるためにともに活動した同志とのあいだにある確かな信頼の想起——それがいまもって可能であることへの歓喜と安堵——これを「いのり」の言葉を用いて伝えるみずからの存在を歴史へと刻印したのだといおう。青木が語った言葉が、「自己の存在に」「自己の価値に聴く」あれとの姿勢をもつ、べつの療養所に暮らす在園者によって記録されたことは、なによりの幸이었다。

**知っているかと問われるひと** 青柳周一から教示の電子メールが届いたその翌28日に、借用依頼をだしていた図書が到着したとの電話連絡が、住まい近くの図書館からあった。その図書をわたしは、青木恵哉についてまとめつつある論集の原稿執筆中に、徳島県立図

書館ホームページの「県内図書館横断検索／とくしまネットワーク図書館システム」を使って知った（2020年1月15日閲覧）。それは厳密に言えば図書ではなく、カラープリントされたシートが入ったクリアファイルだった。書誌情報は、阿南市市民部人権・男女参画課編『青木恵哉パネル展—第23回阿南市人権フェスティバル』（2019年12月）で、「注記」として「第23回阿南市人権フェスティバル：令和元年12月8日（日）阿南文化会館（夢ホール）パネル展」と記されている。所蔵館は、阿南図書館、那珂川図書館、羽ノ浦図書館の3館（現物借用は阿南市立那珂川図書館から）。こうした催しがあること、あったことをまったく知らなかった。情報収集はむづかしい。

同フェスティバルのフライヤによると、テーマは「明るく住みよいまちづくり」、主催は阿南市人権フェスティバル実行委員会、共催が阿南市、阿南市教育委員会、阿南市人権教育協議会、阿南地域人権啓発活動ネットワーク協議会で、阿南市文化会館ほかを会場とし、2019年12月8日の開催、さきの文化会館はホールとホワイエなどに会場が分かれ、そこでの催しものとして後者では「人権啓発標語・ポスターおよび人権作文優秀作品展示」や「「部落差別の解消の推進に関する法律」について展示」とならんで最後に「青木恵哉<sup>けいさい</sup>パネル展」があがっている。

阿南市のホームページから「広報編集室の小窓 12月(1)」に入ると（2020年3月5日閲覧）、vol.3153「人権尊重のまちづくり／阿南市人権フェスティバルを開催」の見出しのもと、「すべての人の人権が尊重される阿南市をめざして啓発活動を行う「第23回阿南市人権フェスティバル」を12月8日に文化会館と富岡公民館で開催し、たくさんの来場者にお越しいただきました。〔中略〕本市出身でハンセン病療養所沖縄愛楽園を築いた青木恵哉さんを紹介するパネル展も開催しました」と紹介し、5葉あげたうちの1葉が同パネル展を写していた。

また、このページのvol.3152は「北条民雄の功績を顕彰 偲ぶ会開催」の見出しで、「本市出身でハンセン病を発病しながら執筆活動を行った作家北条民雄（1914－1937）の忌日（12月5日）を「民雄忌」とし、文学的業績を顕彰する「北条民雄を偲ぶ会」が12月7日に市内ホテルで開催され、約50人が参加し北条や残した作品の理解を深めました。（徳島文学協会、阿南市主催）徳島文学協会会長の佐々木義登さんは「北条は近代文学史上に

大きな影響を残した。その功績を県内外に発信したい」と開催趣旨を説明しました。また、北条に縁のある作家の高山文彦さん、批評家の若松英輔さん、作家の吉村万一さんが「北条民雄 人と文学」のテーマで語り合いました」と報せた。わずか1日ちがいの催しものとして、青木恵哉はパネル展、北条民雄は著名人による講話が開かれたのだった。

さきの「県内図書館横断検索／とくしまネットワーク図書館システム」の簡易検索（以下いずれも「検索完了サイト数：31」）で、「青木恵哉」を検索すると総ヒット件数5、おなじく「北条民雄」が105、「北條民雄」で102、である（いずれも検索結果に重複する図書あり）。甚だしい数の開きだ。どちらも「本市出身」とみなされながらも、その阿南市であれ徳島県内であれ、青木と北条とではその知られぐあいには雲泥の差があるのだ。

ところで、青木は「ハンセン病療養所沖繩愛楽園を築いた」のか？北条は「本〔阿南〕市出身」なのか？<sup>3)</sup>

前掲『青木恵哉パネル展』のファイルの表紙には、「第23回阿南市人権フェスティバル／「青木恵哉パネル展」「15枚まで入っているか確認」と印字された紙片が貼ってあり、A3判2つ折り14枚とA4判2枚、計16枚のシートがクリアファイルに入っている。

シート1表<sup>おもて</sup>には最上行におおきな文字で、「青木恵哉<sup>あおきけいさい</sup>を知っていますか。／ハンセン病<sup>びょう</sup>を知っていますか」と記されている（全ページ横書き）。青木は、「知っていますか」と尋ねられるほどに知られていないひとということだ（引用の2回めにはルビを略す）。「ハンセン病を知っていますか」との問いには、「「ハンセン病<sup>びょう</sup>」は、かつては「らい病<sup>びょう</sup>」と呼ば

<sup>3)</sup> 一般に理解されているであろうところをあげると、出身とは「生まれた土地、卒業した学校、属していた身分などが、そこであること」（『広辞苑』第6版）、「その土地またはその学校などから世に出ること。また、それまで過ごした経歴」（『精選版日本国語大辞典』）、「その土地の生まれであること。また、その学校・団体などの出であること」（『明鏡国語辞典』）。したがって出身地とは「その人が生まれた土地。また、生い育った土地」（『精選版日本国語大辞典』）をいう。「光岡良二作製／（昭和五十五年）」の「北条民雄年譜」にはその冒頭に「大正三年（一九一四）一歳／九月二十二日、朝鮮京城府（現ソウル）漢江通十一番地に生まれる」との記載がある（北条民雄『定本北条民雄全集』上、東京創元社、2003年再版、初版1996年）。「北条に縁のある作家の高山文彦さん」もその著書『火花—北条民雄の生涯』（角川書店、2003年、元版1999年）で「北条民雄は京城府漢江通十一番地で生まれた」と記している。ただし同書第1章冒頭には、「四国徳島の阿南市に流れそそぐその川は〔中略〕初秋の空を映して青々と流れてゆく。このあたりが北条民雄の生地<sup>しぢ</sup>にちがいない」とみえる。「生地」とは「生まれた土地。出生地」、「出生地」は「その人の生まれた土地」であり（『広辞苑』第6版）、「出身地」よりももっと厳密に特定できるはずだが。

れていましたが、「らい菌」を発見したノルウェーの医師・ハンセン氏の名前をとって、現在は「ハンセン病」と呼ばれています」<sup>4)</sup>との答えがあるが、青木についてはそれがなく、さきの問いのしたに、「沖縄県屋我地大橋南側「のがれの島」の碑」の碑文の引用と、「青木恵哉銅像（沖縄愛楽園）」「国頭愛楽園開園当時の青木恵哉／（写真は沖縄愛楽園自治会・交流会館提供）」のキャプションがついた2葉の写真があるにすぎない。シート1裏にも写真があり、「（写真は沖縄愛楽園自治会・交流会館提供）」のキャプションと、その被写体である「頌徳碑」の説明があるだけで、やはりここにもさきの問いの答えはない。

シート2表に、「明治26年（1893年）現在の阿南市に生まれました」と始まる青木の略歴と事績が記される。そのつぎの記述が、「16歳でハンセン病を発病し、四国遍路を経て香川県高松市の大島療養所（現在の大島青松園）に入所しました」では、そこにちぐはぐしたところをわたしは感じてしまう。さきに出生地名に、ここに療養所名に、「現在の」とつけるのであれば、療養所の所在地名にも「現在の」とつけるべきで、当時の大島療養所の所在地は高松市ではないはずだ。それはともかく、ついで、「大正12年（1923年）熊本市の回春病院に入院し、ハンナ・リデルと出会い、彼女が与えた使命により、青木は沖縄へ伝道におもむく――

沖縄では、ハンセン病患者の過酷な生活と厳しい差別を知り、住民の猛反対にあいながらも、土地を獲得し、生活を始めました。この場所を基礎に、昭和13年（1938年）国頭愛楽園（現在の国立療養所沖縄愛楽園）が開園します。

と（さきの大島青松園も国立療養所で、回春病院はそうではない、念のため）、青木の事績を「土地を獲得し、生活を始め」たと示したうえで、その総括をつぎのとおり記した――

4) 厚生労働省が「ハンセン病に対する差別や偏見を解消し、ハンセン病患者及び元患者の名誉を回復することを目的とした、中学生向けパンフレットを以下のとおり作成しましたのでお知らせします」と同省ホームページをとおして発信、かつ、「平成15年1月31日より全国の中学校、教育委員会等に対し直接送付して」いる「ハンセン病を正しく理解するための中学生向けパンフレット」の「平成20年度から」用いられている「ハンセン病の向こう側：生徒用」（2019年2月発行版）にも「かつては「らい病」と呼ばれていましたが、明治6年（1873年）に「らい菌」を発見したノルウェーの医師・ハンセン氏の名前をとって、現在は「ハンセン病」と呼ばれています」との記述がみえる。さきのシートの記述は正確を期するために厚生労働省発行パンフレットに記載された記述をほぼそのまま転載したとうかがえるが、「らい病」の名称を避けて「ハンセン病」としたのに「らい菌」の語がそのままであることに疑問を感じなかったのだろうか。

青木は、自らもハンセン病を患いながら、病友たちのために療養権獲得をめざして活動し、ハンセン病療養所である「沖縄愛楽園」の基礎を築いた人です。

——青木はあくまで、ハンセン病をめぐる療養所の「基礎を築いた人」だということである（傍点は引用者による）。簡潔に言えば、「青木恵哉を知っていますか」との問いにたいし、それに答えられないひとには、引用した2行に記された内容を教えるということか、「青木恵哉を知っていますか」と問われたら、その内容を答えればよいということか。

以下、目次がわりにこのファイルにおさめられたシート記載の項目名をあげよう（ルビ省略）。シート2裏「青木恵哉関係略年表Ⅰ」、シート3表「青木恵哉関係略年表Ⅱ」、シート3裏「(1)出生から発病まで」、シート4表「(2)大島療養所（現在の大島青松園）に入所」、シート4裏「(3)大島療養所での出会い」、シート5表「(4)熊本へⅠ」、シート5裏「(4)熊本へⅡ」、シート6表「(4)熊本へⅢ」、シート6裏「(5)沖縄へ」「(6)沖縄での伝道活動」、シート7表「(7)沖縄のハンセン病療養所建設計画と地元住民の反対」、シート7裏「(8)仲間とともに立ち上がるⅠ」、シート8表「(8)仲間と共に立ち上がるⅡ」、シート8裏「(9)ジャルマ島での生活」、シート9表「(10)愛楽園誕生Ⅰ」、シート9裏「(10)愛楽園誕生Ⅱ」、シート10表「(10)愛楽園誕生Ⅲ」、シート10裏「(10)愛楽園誕生Ⅳ」、シート11表「(11)ハンセン病とはどんな病気ですか?」、シート11裏「(12)法律が差別、偏見を加速させた」、シート12表〔写真キャプション〕「職員の予防衣（菊池恵楓園社会交流会館：熊本県合志市）」「菊池恵楓園社会交流会館の展示より」、シート12裏「(13)らい予防法の廃止に向けて」、シート13表「(14)療養所入所者の人権回復のたたかい」、シート13裏「(15)ハンセン病家族訴訟」、シート14表「(16)阿南市と合志市のパートナーシティ協定」、シート14裏〔写真キャプション〕「令和元年10月1日熊本県合志市役所においてパートナーシティ協定締結」「令和元年10月2日菊池恵楓園職員及び入所者自治会との懇談会」、シート15「参考文献」、シート16「この文書の無断転載、SNSなど、インターネット上に流すことはご遠慮ください。／阿南市人権・男女参画課」<sup>5)</sup>。

<sup>5)</sup> 本稿執筆にあたり「無断転載」とならないよう引用にさいしての注意事項をいちおう同課に電話をかけて確認した（2020年3月9日）。「沖縄愛楽園自治会・交流会館提供」の写真などを掲載しているための処置として「無断体裁」への注意を明示したとのことで納得がいった。ただし文字のみの引用でも「引用許可申請書」を提出せよとのことで、同日

さきにみた、徳島県内の公立図書館における蔵書数にあらわれているとおり、北条民雄にくらべて青木恵哉はなかなか知られづらいところがある。それが2019年の「第23回阿南市人権フェスティバル」において、「人権教育・啓発」の観点からあらためて、ようやく青木が知られる機会が設けられたのである。シート14表の(16)には、つぎの記述がみえる。

阿南市は、ハンセン病に罹りながらも、川端康成に見出され、『いのちの初夜』など、優れた文学作品を遺した作家北条民雄の出身地であり、またハンセン病の元患者で、沖縄のハンセン病療養所沖縄愛楽園の基礎を築いた青木恵哉の出身地でもあります。

——北条を「元患者」と記さない理由は、彼の療養生活がプロミン以前ということ、いいかえれば治す薬がなく治らなかったから「元患者」とはいえないということ、なのか。では、べつなところでも書いたとおり、彼は阿南市「出身」なのか。また、青木についてはさきにみたシート2表とおなじくここにも「沖縄のハンセン病療養所沖縄愛楽園の基礎を築いた」と明示されているところが重要である。それというのも、くりかえせば阿南市のホームページには、「本市出身でハンセン病療養所沖縄愛楽園を築いた青木恵哉さん」との記載がみえるからである。「沖縄愛楽園の基礎を築いた」と「沖縄愛楽園を築いた」とでは、それぞれの文辞が指し示す様態が異なるのだ。わずか3文字の多寡の違いではあれ、その差はおおきいはずだ。

さて、シート15の「参考文献」には、わたし（たち）の文献もあがっていた。『選ばれた島』をいま手にしようとするとき、徳島県の公立図書館には、青木恵哉著、佐久川まさみ編『選ばれた島—沖縄愛楽園創設者の生涯』（聖公会沖縄教区祈りの家教会、2014年改訂新版）ただ1冊しかないなかで（所蔵機関阿南市立阿南図書館）、石居人也とわたしが監修、解説を担った、『選ばれた島』リプリント・ハンセン病療養所シリーズ1（近現代資料刊行会、2015年）をあげているところが適切である（その理由は同書解説参照。以下同書を、リプリント版、と略記する）。また、わたしの単著『島で—ハンセン病療養所の百年』（サンライズ出版、2015年）もあがっている（その第V章が「著書を精査する—青木恵哉」）。ただし、どちらにもわたしの名が、ふりがなをふったうえで、「安威」と表記されている。阿部を安部と間違えられることはしばしばだが（安倍と間違えられないのは幸いだ）、安成

---

付の同文書を同課に宛てて電子メールで添付送信した。

を間違えられることは少ない。威は「なり」とは訓じないだろうにとおもったら、『新漢語林』には「威」の「名前」よみに「なり」とあった。致し方なしか？

**その適否が問われる記述**　せっかく「参考文献」に『選ばれた島』をあげながら、このクリアファイル内のシートではそれにひとつもふれないままとなったことを、わたしは不思議におもう。青木恵哉の自伝といわれるばあいがあるそれは、北条民雄の著作『いのちの初夜』と違って著名な作家に「見出され」たわけではない。だから青木は「優れた文学作品を遺した」との榮譽をうけられないのである。さらにもうひとつ——だから、といってよいだろうか、さきに示したとおり、『選ばれた島』はデータベース上では、徳島県内の公立図書館では1館でだけそれを手にすることができる稀覯本となってしまった。

同書『選ばれた島』（著者青木恵哉、発行者 W.C.ヘフナー William C. Heffner、印刷 1958年）の本文末尾をみておこう。

当時日本の公立癩療養所（勿論宮古療養所も含む）はすでにみな国立になっていたの、県は厚生省に交渉し、ここに国立癩療養所国頭愛楽園が誕生することになり、昭和十三年（一九三八年）二月一日、沖縄 MTL は、沖縄救癩の先駆的的使命を果して、その経営する相談所を政府に移管したのである。

と記し、ついで『新約聖書』からの引用があり、「（終り）」とあったうえで「附記」をおく——

附記／国頭愛楽園は昭和十三年（一九三八年）十一月十日立派な設備と陣容をもって開園したが、今次の大戦で灰燼に帰した。戦争中私はクリスチャンの故に、また、多くの迫害に会った。さいわいにして愛楽園は灰燼の中からフェニックスのごとく再び羽ばたいた。そして信仰の殿堂「祈りの家」が与えられ、信者の数も戦前に倍するようになった。沖縄聖公会のヘフナー主任司祭と鬼本司祭の御指導を受けつつ、今私は本当に幸福である。／愛楽園創立以後については、また、適当な時機にペンをとりたい。

——この記述をもって閉じられた同書には（「あとがき」をのぞく）、「愛楽園創立以後」についても「今次の大戦」下での療養所のようなすについても、まったくといってよいほど記されていないのである。

クリアファイル内のシートにもどると、その「(10)愛楽園誕生IV」には、

沖繩MTL相談所設立後の青木は、入所者となり、園外との接触もなくなりました。

／国立になってからも、愛楽園はキリスト教的雰囲気が濃厚で、青木が入所者の精神的指導者であったことは言うまでもありませんが、新しく入所してきた者の中には、愛楽園当局に不満を抱き、青木を職員のみかたみなして、青木に暴力をふるうこともありました。

と記されていた。

疑問 1： シートにおいて、「沖繩 MTL 相談所設立後の青木は、入所者となり、園外との接触もなくなりました」というときの「以後」とは、いつまでを指すのか。すぐつぎの文が、「国立になってからも」と始まる。そのときも青木は「入所者」であるはずなので、「以後」とは「沖繩 MTL 相談所設立」ののちずっと、と読める。「入所者」となった青木は、ずっと「園外との接触もなくな」ってしまったのか？

「参考文献」にあげられた、「阿部安威」による『選ばれた島』と『島で』を読むと、そうではないとわかる。

さきのシートを読んでも、『選ばれた島』を手にしていないひとのために説明をしよう。石居人也とわたしが監修した『選ばれた島』は、さきにあげた同書 1958 年印刷版と、もうひとつ、編者渡辺信夫、発行所新教出版社の 1972 年発行版の同書を収録したところがおおきな特徴であり意義であると、わたしたちは考えている（以下、前者を 1958 年版、後者を 1972 年版、とする）。後者には編者渡辺による「解題」があり、シートの文章執筆者は、この「解題」をみて、そこにある文章をほぼそのままシートに記したのだろう（シート 2 表にある「療養権獲得」というハンセン病をめぐるあまり使われない用語もそのまま「解題」にある）。

「解題」の「愛楽園設立以後」の見出しのもとに、つぎの文章がある。

MTL 相談所が開設された以後、著者は入園者となってここに収まり、沖繩島全島を股にかけて往時の活躍はもはや見られない。園外との接触もなくなった。

——さきの見出しのもと、この引用箇所につづく「解題」の文章は、「愛楽園開設後の著者の「余生」にふれ、著者ゆかりの場所に「頌徳碑」が建てられたり、著者がすごした場所

が「遺跡」となったりしたことを報せ、「戦中、戦後の愛楽園の歩み」を記した「資料」の書誌情報をあげて終わる。

「解題」執筆者は、石居とわたしが明らかにし、リプリント版「解説」に書いたあれこれのもととなった史料を知らなかったのだろう。シート執筆者もまた、わたしたちのリプリント版「解説」を読まなかったか、読んだとしてもそこに意義を認めなかったのだろう。

「沖縄 MTL 相談所設立以後の青木は、入所者となり」はしたが、「園外との接触もなくなり」はしなかったのだ（その詳細はリプリント版「解説」を参照のこと）。なによりシートそのものをみても、「(4)熊本へⅢ」に「昭和38年（1963年）ハンナ・リデルの墓参のために熊本市に戻ったときの写真です」との文言とともに、「回春病院跡地にて／後列の左から二人めが青木」とのキャプションがついた写真を載せているのだから、このあとのシートに「沖縄 MTL 相談所設立以後の青木は、入所者となり、園外との接触もなくなりました」と記しても、その記述の正しさはシートそのものによって裏切られるのだ。

疑問 2：「国立になってからも、愛楽園はキリスト教的雰囲気濃厚で、青木が入所者の精神的指導者であったことは言うまでもありません」との記述内容は、同園のいつまでのようすをあらわしているのか？

確かに、『選ばれた島』1972年版「解題」のさきの見出し「愛楽園設立以後」のもとに、国立に移管されて〔中略〕初代のおもだった職員はみな、開拓者の精神のみなざるキリスト者であった。したがって、国立の施設ではあるが、キリスト教的雰囲気が濃厚であった。著者が入園者の精神的指導者であったことはいうまでもないとの文章がある。これまたシートの記述が「解題」の文章ととてもよく似ているとわかる<sup>6)</sup>。ここに引用した文章のすぐ 2 行あとに、原典では、「しかし、そのころすでに大陸における戦争がはじまっていた。園内では朝夕の祈りが捧げられたが、祈りに先立つものは国旗掲揚と皇居遥拝であった。国家主義の重圧は次第にきびしく、回春病院から沖縄に派遣される伝道者たちはスパイ嫌疑で逮捕された」と記してある。「伝道者たちはスパイ嫌疑で逮

<sup>6)</sup> わたしは本稿の「その適否が問われる記述」と見出しをつけた文章を、2020年3月17日に書き始めた。さきに示した「引用許可申請書」の提出後である。シートの記述は適切な引用あるいは転載なのか、とても気になるところだ。ここにいう、適切か、とは正確かと問うているのではない。

捕された」ときも「キリスト教的雰囲気濃厚」だといえるのか、いいや、それが「濃厚」だったからこそ、「逮捕」にまでいったということか。

この「解題」では「スパイ嫌疑で逮捕された」のあと改行があり、つぎの段落の「初代園長が星塚敬愛園に転出し、二代目園長の早田皓が着任した昭和一九年は、沖縄戦争の直前であり、全島にわたって陸軍部隊が配備されていた。沖縄のライの歴史の最も暗い時代がはじまった。〔中略〕軍を動かして強制収容をさせたのも園長である。この園長は極度の国家主義者であった」との記述へとつづく。「極度の国家主義者」が園長となった戦時下の療養所で、そこが「キリスト教的雰囲気濃厚」だったといい得るのだろうか。もとより、「解題」もその具体相を記してはいない。とはいえ、引用なり転載なりをするにあたっては、そのもととなる記述の妥当範囲をふまえる必要があるはずだ。シートにおいて、さきに引用した箇所につづくところは、1行分くらい空白があったうえで、「昭和44年（1969年）3月6日、青木は沖縄愛楽園で亡くなりました」と記してそのシートの文章を終えたのだから、「キリスト教的雰囲気濃厚であった」ようすも、青木の「園外との接触もなくなったことも、青木が亡くなるまでつづいたと読めてしまう。

さらにまた、『選ばれた島』1972年版「解題」のおなじ見出しのもとにある文章——「著者〔青木〕に師事した上間源光（うえま・げんこう）氏によれば、著者はこう述懐した。「〔中略〕愛楽園ができてからは、かつての同志が信仰から離れて行き、自分自身も戦いが終わって平和な暮らしをしてみても、自分がこれまで信仰といていたもののむなしさを感じるようなことが起こってきた……」との青木の感慨を読めば、「かつての同志」どころか青木自身さえも、その「信仰」のようすがかわったと顧みていたというのだから、「キリスト教的雰囲気濃厚」だった時期を区切らなくてはならないはずだ。さらにまたまた、この引用箇所のまえに「解題」執筆者が、「著者〔青木〕は肉体的・精神的に老化し、新しい状況に対してもはや往年のような指導力を発揮することができなかつた」と評していたのだから、「国立になってからも、〔中略〕青木が入所者の精神的指導者であったことは言うまでもありません」との指摘もまたまた、時期を区切ったほうがよいかどうかの考察が必要となるはずだ。シート執筆者は、「解題」をきちんと読んでいないか、あるいは、「解題」の内容を否認していることとなる。

疑問3：「新しく入所してきた者の中には、愛楽園当局に不満を抱き、青木を職員の方とみなして、青木に暴力をふるうこともあった、と指摘されたこのことをどう考えるのか？

これまた「解題」には、さきに引用した「著者が入園者の精神的指導者であったことはいうまでもない」のところで「いうまでもないが」とつづけて、「いうまでもないが、園当局に対して不満を抱く新入患者は、著者〔青木〕にリンチを加え、著者は前歯を折られることもあった」と記されている（傍点は引用者による）。これもまた、シートに同様の記述として転載されている。ただし、「青木を職員の方とみなして」の文辞は、「解題」にはみえないので、これはシート執筆者固有の見解となるか、あるいは、「解題」にみえる「園当局に対して不満を抱く新入患者」との記述をいわば翻案したのか。

さきのシートで、「ハンセン病療養所である「沖縄愛楽園」の基礎を築いた人」とあらわされた青木が、その療養所において、「愛楽園当局に不満を抱いた「新しく入所してきた者」が「青木に暴力をふるうこともあった、というとき、その理由としてあげられた「青木を職員の方とみなして」との解釈の根拠はなにか、また、この暴力行為は、園の「基礎を築いた人」＝「職員の方」対「園当局に不満を抱いた「新しく入所してきた者」という対立の構図を描けば理解できる出来事なのか？

青木への暴力については、シートの「参考文献」にあげられた文献のなかで、すでにみてきた『選ばれた島』1972年版収載「解題」にのみその記述がある（とみてよい）。厳密に言えば、それはわたしたちが監修したリプリント版として「参考文献」にはあがっている。リプリント版に載せたわたしたちの「解説」も、わたしの著作でも、青木への暴力にはふれていない。そのことと、「解題」執筆者については、つぎに述べる。

それにしても、ハンセン病をめぐる療養所の「基礎を築いた人」がそののち、（おそらく）その療養所内で「暴力をふるわれたとはただごとではないとおもうのだが、シートの記述はずいぶんと淡泊にとどまっている。

**「神学者」** 『選ばれた島』1972年版巻末に載る「編者あとがき」にある、「著者青木先生との文通が始まったのは、先生の最晩年のことでした。まだ沖縄渡航がむずかしかつ

た頃で、わたしはついに生前の著者にお会いできなかった」との記述を読み、読者は、同書編者が青木恵哉に会っていなかった、と知る。また「編者あとがき」には、「わたしがさきに書いた『沖縄ライ園留学記』（教文館出版部）は、実は『選ばれた島』復刊のためのわたし自身の準備作業であり、また『選ばれた島』の読者のための手引きでもあったのです」ともみえる。この著書の正確な書誌情報をあげるとそれは、渡辺信夫『沖縄ライ園留学記』non-fiction 愛と希望の記録 7（教文館、1970年）で、同人はほかに、『ライ園留学記』non-fiction 愛と希望の記録 1（教文館、1968年）も上梓していた。

両著の奥付に記されたところによると、著者は「京都大学文学部哲学科卒業後伝道者となる／現在日本キリスト教会東京告白教会牧師。東京女子大学講師」である<sup>7)</sup>。以下、同人を「神学者」と記す。

著書の後者は、当時のハンセン病をめぐる療養所 11 施設を訪ねた記録で<sup>8)</sup>、その「VII 寂光の島一大島青松園にて」には、国立療養所大島青松園のキリスト教霊交会会員だった三宅官之治や長田穂波などについての記述があるが、そこでは青木恵哉にはいっさいふれられていない。

---

<sup>7)</sup> 同人の大学卒業年を調べるためウェブ検索をし Wikipedia を閲覧したところで同人の訃報を知り、さらにウェブ版「The Kirisuto Shimibun/KiriShin」でも同人の逝去を知った（2020年3月28日閲覧）。2020年3月27日午前1時没、享年96歳。後者のウェブサイトは同人を「文学博士」「神学者」とみせ、その略歴を「カルヴァン研究の第一人者として多くの著訳書を手掛けたほか、軍国少年として教育された戦時体験もふまえ靖国神社、沖縄、ハンセン病などの社会的課題についても積極的に発言し続けた」と報じた。リプリント版をつくる過程で著作権のことを相談するためもうひとりの監修者である石居人也是同人と連絡をとったが、わたしはその機会を失した。青木恵哉をめぐる議論をできなかったことを悔やむとともに、同人の冥福を祈る。なお同人についての Wikipedia の記述では著作23点、共著7点、翻訳13点があげられるも、そこには『ライ園留学記』があっても『沖縄ライ園留学記』はなく編著としての『選ばれた島』1972年版もない。

<sup>8)</sup> 同書「まえがき」に「この本に収められた文章は、国立のライ療養所全部をまわって、そこで学んだこと、感じたことを、いろいろな機会に書きしるしたものです」「日本には国立のライ療養所が十一」とあり、同書巻末の「国立、私立ライ療養所所在地図」でも国立療養所は11である。ただし同書「あとがき」には、「なお、わたしは日本国内の十一のライ療養所を全部訪ねさせていただいたのだが、実は二つの療養所が洩れている。それは、沖縄にある屋我地（やがち）愛楽園と、宮古南静園である。できればそこまで足をのびたかった。それに、わたしにとって沖縄は戦争の思い出と結びついている。〔中略〕もう一度訪ねたいとの切ない気持ちがある。だが、今回はその実現を見合わせた。わたしは、気持ちをよほど整理してからでないと、多額の旅費をつかって、わたし自身の古戦場をふたたび踏むことはできないし、今なお取り残されて、重荷を負っている二つのライ園を訪ねるには、十分な準備が必要だからである」とその訪問を留保する心情を明かしていた。

著書の前者をみてゆこう。この「神学者」が最初に沖縄のハンセン病施設を訪れた1969年6月は、青木が逝ってから3か月ほどしか経っていないときだった。そののち同年12月、翌1970年7月と、彼は「三度にわたって沖縄とそこにある二つのライ療養所を訪ねている（「あとがき」）。その最初の訪沖目的は、「昨年〔1968年〕末、青木先生がわたしの『ライ園留学記』を病床で読まれて、わたしに来てほしいと言われたこと」だった。同人は、青木の「名まえはかねてから聞いてはいたが、数年前この本〔青木先生の著書に『選ばれた島』というのがある〕を借りて読み、先生のすばらしさを知り、その事業の偉大さもはじめて知った。渡沖して訪れた国立療養所沖縄愛楽園では「自治会の人たちのところに行って、懇談会がはじまり、「わたしがいちばん聞きたいのは、青木先生が創立されたころの様子であ」ったのだが、「自治会の役員の中にはそのころのことを知る人はいない。わたしはもう少し時代をくだったところからはじめなければならない。すなわち、戦争中と戦後の苦しみ」について聞くこととなった。

同園で「神学者」は、「愛楽園の教会「祈りの家」の執事である徳田〔祐弼〕先生」、「自治会長の田場〔盛吉〕さん」、医者で第7代園長の「湊〔治郎〕先生」、「前自治会長でカトリックの会長である天久（あめく）〔佐信〕さん」、「祈りの家の司祭箭野（やの）〔清作〕先生」、伝道師の「松岡〔和夫〕さん」たちに会う。祈りの家の「主だった人たちとの話し合い」では、「青木先生の残して行かれたものが汲みとれるのではないかと期待していたが、その期待はむなしくなかった。ただ、わたしはそこで聞いたことを全部書くわけにはいかない。当時、青木先生とともに創立の主役であった人のいくたりかがまだ存命である。青木先生の『選ばれた島』の中に仮名で登場する人がいる。「もう書いてもらってもいいでしょう」と徳田先生が水を向けるのだが、かれはまだうけがわかない。自己の功績がおぼえられることを許さない謙讓のきびしさが感じられた」と、「神学者」は記した。

このとき彼はまた、青木が同人の来沖を「楽しみにしておられた」と聞く。その理由は、「先生は『選ばれた島』の続篇、というよりもあの本がたどった外面の道と違う、内面の歴史をわたしに書かせようと考えておられたらしい」というのだ。けれども、「わたしにすっかり話して聞かせるつもりだと言っておられた内容は、ついにわからない」ままとまってしまったと惜しむ。

1969年12月の2回めとなる国立療養所沖縄愛楽園訪問でこの「神学者」は、いくにんもの重要な人物に会っている。同人を歓迎して開かれた「懇談会」に、「愛楽園発祥のむかしのことを聞きたいといっているわたしの願いをいれて、古くからの入園者が集まって」きた。そのなかに、宮良保と上間源光がいた。「神学者」が「わたしは青木先生から『選ばれた島』の再版を出すよう」要請をうけていたので、それへの「協力をお願い」した。「神学者」は、同書が書かれ、つくられてゆく経緯を知る。

この前『選ばれた島』の草稿が書かれたのは、〔園内の〕あの海辺の洞穴においてであった。草稿はそのままでは本にならないので、宮良保さんがその草稿も用い、青木先生の口述も用いて書きおろした。宮良さんの視力は次第におとろえ、仕事は難渋し、停滞したが、ついに書きあげられたところまでで打ち切りにして、本が出たのは一九五八年のことである。宮良さんは失明したのである。

——ここにいう宮良の所為については、のちに、「神学者」が『選ばれた島』の再版」すなわち同書1972年版をつくるにさいして、自身が執筆する「解題」に、「この原稿を書物の形にするためにリライトした宮良（みやら）保氏（旧版では新垣〔あらがき〕政治となっている）は愛楽園入園者中最高の学歴を有する知識人であるが、文字通り身を惜しまぬ協力によって約二か年をついやして原稿を完成し、ついにそのために失明して現在にいたっている」と記されることとなる<sup>9)</sup>。その「解題」の「本書の成立」と題された見出しのもとに、「初版の際、著者がしるした「あとがき」をまずかかげたい」と、『選ばれた島』1958年版「あとがき」が転載された（ただし転記にさいして改変がとても多い）<sup>10)</sup>。その「あとがき」の原典——1958年版のそれをみると、そこには、青木がいったん書きあげた「沖縄救癩史の沿革」についての原稿には、彼自身が、

丹念に読み返して見た結果、大きな欠陥のあることを知り、どう考えても活字にする価のないことがわかった。／しかしそれかといってこれを再編するの自信はなく、その窮

<sup>9)</sup> 以下この『選ばれた島』の1958年版と1972年版の編集をめぐるのは、前掲阿部ほか監修『選ばれた島』所収「解説」の石居執筆箇所と重なるところがある。

<sup>10)</sup> この『選ばれた島』の1958年版と1972年版との異同については、阿部安成「復刊事情—ハンセン病療養者の著作『選ばれた島』をめぐる」(Working Paper Series No.223、滋賀大学経済学部、2015年3月)を参照（滋賀大学附属図書館ホームページのリポジトリで全文ウェブ閲覧可）。

状を畏友宮良保に訴えたのである。／当時、氏は療養中にも拘らず、私の苦衷を察し、快くこれを承諾して援助を惜まなかった。そして昼夜兼行、原稿と取っ組んで書き努力をつづけるうち、眼疾によって視力を冒され、一時は原稿よりも氏の健康が気遣われたのであるが、一年有半の静養によって快復し、再びペンを執ってこれを完成されたのである。／あの、憂慮していた原稿は氏によって整備せられ、脱稿するにいたったことは誠に感謝に堪えない。〔下線は引用者による〕

と記されていた。これが、『選ばれた島』1958年版「あとがき」にある記述である。

青木恵哉と『選ばれた島』とを研究するものにとっては周知のことがらをここにあげると、『選ばれた島』1958年版のいくつかでは、さきの引用箇所の下線部は、本文を黒く塗りつぶしたうえでその右わきに、「宮良保」の3文字がスタンプで押されているのである（いくつかには黒塗りもスタンプ押印もない）。「神学者」は、『選ばれた島』1972年版を編集するにあたり、この「あとがき」をもとあった巻末から、とくに断り書きを入れずに「解題」へと移し、しかもくわえてこれまた断りなく、表記を改変し、さきの下線部をも「新垣政治」に書き改めていたのだ。

この所為の是非や適否をいまは論じないものの、「選ばれた島」と書名がつけられる著述へと原稿を「整備せられ、脱稿するにいた」るまでに尽力したと『選ばれた島』1958年版「あとがき」に記されていたその当人に、「神学者」は訪沖時に会っていたのである。

宮良との面談の場を「神学者」が記録している——『選ばれた島』を「書きあげられたところ」について「淡々と話してくださった。その苦労が大きかったことは、考えてみればわかるのだが、宮良さんは苦労ばなしとしてはそれを語らなかった。奥床しい話しぶりである」とうけとめられたのだった。さらに宮良から、「青木先生の原稿は部厚く二冊にとじてあって、そのうちの一冊を本にしたという。あとの一冊は、宮良さん自身の失明のために、手がつけられなかったそうである。その一冊がまだ残っているはずだ」と聞いた「神学者」は、「わたしは膝をのり出して、聞きいる。もし『選ばれた島』の続篇の原稿があれば、そして宮良さんはもうその仕事に耐えられない以上は、わたしが宮良さんのあとをついでリライトをしなければならぬ」と決意し、その原稿のゆくえを尋ねたが「だれも知らない」。ついで——

徳田先生の指示で、青木先生の遺品を取めた段ボール箱がとり出され、二、三人の人がそれを調べてみる。一冊の原稿が出てきた。一座は色めきたつ。いろいろの筆跡で書かれている。はじめのうちのは青木先生の直筆である。徳田先生の筆跡とわかる部分もある。口述筆記である。／宮良さんにさわって見てもらい、はじめのところが少し読んで聞いてもらう。たしかに、これが『選ばれた島』になった原稿のもう一方のものである、とかれは証言する。

**問われる「神学者」の審判** 青木の遺稿ともいえる現物が、「神学者」訪沖のそのときに、あらためて登場したのである。この一大発見ともいうべき事態にさいして「神学者」は、「しかし、内容は「続篇」とはいえないのではないか」との疑義を感じ、「急いで読みとおしてみたが、あの劇的な事件の記録の続きではなく、理論が書きつらねられている」と判断した。『選ばれた島』の続篇を「内面のものにする」との青木の要請は、「つまり、この一冊の原稿をわたしに手渡して、これをリライトせよというつもりでおられたらしいのである」と、「神学者」は推察した。「理論」すなわち「内面のもの」ということなのだ。

だが同人は、この原稿を持ち帰らなかった。理由は、「これでは本にならないのである」から——「第一、分量的に少なすぎる。『選ばれた島』の重量感に見合うだけの続篇にはならないのである。そして、第二に、青木先生は理論を展開した書物を書きあげて、世に残すタイプの人ではなかったのだ。その足跡を書きとめることは有意義だが、その論説を書きとめることはさほど必要ではないのではないか。……それに、ライ事情がずんずん変わっている今、先生がだいぶん前に書いておかれたライ理論はもう陳腐ではないだろうか」と「神学者」は評価断定した。

前掲『沖縄ライ園留学記』の著者であるこの「神学者」は、自著巻頭の「I 見捨てられた島、選ばれた島—沖縄愛楽園にて」の「一 見捨てられた島」に、沖縄に「長い間心を引かれていた」理由のひとつに青木恵哉があったといい、その青木は、ハンセン病をめぐる療養所において、「ただひとつ、例外として」、「病者自身」がわずかな土地であっても、「だれからも文句を言われなくて療養のできる場所がほしい」と願い、その権利を戦い取ったのが愛楽園の基礎」で「青木先生はその戦いのリーダー」であり、また、その「人権意識

と、それを戦いとした非暴力の戦いの方法、さらにその戦いを根底からささえたこの病者集団のキリスト教信仰について、ぜひ学んでこななければならないと思った」と記したとおりの高評があるがゆえに彼を「先生」と仰ぎ、あわせて、「わたしが沖縄に行ったのは、見るためではなく、考えるためでもなく、学ぶためであったことは動かしえないから（同書「はじめに」）、前著同様に沖縄でのことがらをまとめるにあたって、「留学記」の語を書名に籠めたのだった。

その当の青木から出版を託された原稿であるにもかかわらず、その「分量」と「重量感」を低く見積もり、かつ、「理論を展開した書物を書きあげて、世に残すタイプのひとではなかったのだ」と、いうなれば出版の原稿審査において落第点をつけたのである。まさに「神学者」の面目躍如というところだろう。

「神学者」は、集まったひとたちにたいして、「続篇を出版するよりは、前の『選ばれた島』をもう一度出版することに力を入れたほうがよいと思います。こちらの原稿は、青木先生を知っている人たちに読んでもらうために印刷して配るならば、意義のあるものですが、先生を知らない人に対しては『選ばれた島』のもつ迫力はありません」と告げ、彼がまさに審査者としてふるまうことで、「続篇の話はそれきりになった」。彼はつづけて、「青木先生にはまだほかに構想があったのかもしれない。それは永久に知り得ないものとなってしまった」と附記したのだが、しかし、「知り得ない」ことをめぐってあれこれいっても、どうにも詮無いことにすぎない。「青木先生」の「構想」とはべつに、「神学者」はみずからの判断で、みずからが「編者」となって、『選ばれた島』を「復刊」したのである。

もうひとり、上間源光——彼も「視力を失ってしまった」。入園は「愛楽園開園の年（昭和一三年）」のこと、「青木先生の指導を受けて信仰者となったのは戦後のことである。それ以前には深い人格的接触はなかったらしい」。

源光さんの思い出のうち、重苦しいまでの重みを感じさせたのは、青木先生が源光さんに述懐された一ふしである。「愛楽園が創設されるまで、さまざまの困難と迫害があったが、目標があったから苦しくなかった。しかし、愛楽園ができてからは、かつての同志が信仰から離れて行き、自分自身も戦いが終わって平和な暮らしをしてみても、自分がこれまで信仰とっていたもののむなしさを感じるようなことが起こってきた。……」

と同人が伝えた青木の言を聞いて「神学者」は、

青木先生は迫害に負けない強靱さを賜物として授かっていた人であるが、迫害がないと寂しさに耐えがたくなったのだ。性格的にそうだったらしく、若いときにも、回春病院の平和さに耐えがたくなり、戦いを求めて、四国のお遍路さんの中にまじるライ者への伝道を志し、反対をおしきって着手したことがある。だが、晩年、新しい戦いを開拓するには、もう体力も気力もとぼしかったのではないだろうか。園内では「タンメイ（旦那前）」（老人という意味）と呼ばれ、一目置かれてはいたが、かれに新しい戦いの道をつけてくれる人もなかった。戦いとしては、ただ一つ「耐える」という内面の道だけしかなかった。

と推察した青木評を記した。一面識もない相手にたいして、ずいぶんと印象の押しつけが強いように感じる。ともかく青木を「戦い」のひとと造形し、しかし、それは「迫害」への対抗であって、「平和」となるとその必要もなく、ただ「耐え」て暮らしたということか。

さらに「ある入園者」の談話も「神学者」は記録している――

ある機会にわたしにそっとささやいたことがある。「今でこそ、みんなは『青木先生』『青木先生』と言っていますが、先生が生きておられたころは、それはもう孤独なものでしたよ。先生の生涯の後半は、ほとんど忍従につきていました……」

――『選ばれた島』には記されなかった、「晩年」の、「耐える」、「孤独」な青木のように、そのみぢかにいたものたちから語られたと記録された。「神学者」はこのように、青木が暮らした療養所を自身が訪ねたときにもいた、青木を知るひとたちからの「話を聞いているうちに、わたしの胸の中によくはっきりと青木恵哉像が結晶した」という――それはひとつには、「沖縄の救ライのために神が選んで、召して、派遣されたかけがえもない器であり、もうひとつに、「神はその使命が一応終わったあと、さらに新しい使命を授けることはされなかった。かれにとっては、その後はただ耐えて生きるためにだけある余生であった」とみなされた、その像である。

この「神学者」は端から、「青木先生に対する関心をさらにそそられるのは、愛楽園ができてからの先生の行動である」とさきにみた自著のⅠの一に記していた。もとより『選ばれた島』が同園開園までの記述だったから、そこに記されなかった開園後のようすを知

りたくなるとは当然のことかもしれない。

先生は依然として入園者の精神的指導者であったが、患者の自治活動の表に立つようなことはされなかった。先生が朝日賞の候補にあがったことがあると聞いた。朝日新聞社は、先生が愛楽園の開設後は、別に社会的な活動をされなかったので、候補からはずしたそうである。わたしは惜しいとは思わない。先生はそのような賞によって報いられるのとは別のタイプの人間であり、別の価値基準に生きたのだ。つまり、かれは宗教的人間である。わたしはその生き方に接したかった。

——ここ（自著のⅠの一）にも、「神学者」の青木にたいする一面化がうかがえる。彼にとって青木はなにより信仰に生きる「宗教的人間」でなければならないのだ。

ここで、「朝日賞」についてふれると、同賞の一部門として1947年に設けられた「朝日社会福祉賞」の最初の受賞者が光田健輔（1949年、「救癩事業への献身と癩治療の研究」）で、そののち、ハンセン病にかかわる同賞受賞者は、1977年に井深八重（「半世紀以上にわたり癩者の福祉向上に尽くした功績」）、1979年に上原信雄（「沖縄における救癩運動と、学徒援護活動に尽くした功績」）、1985年に林富美子（「半世紀、癩者と寝たきり老人に尽くす」）、1988年に犀川一夫（「沖縄のハンセン病治療、予防、啓発に尽くした功績」）、1997年に中村哲（「パキスタン、アフガニスタン国境地域でのハンセン病治療、難民医療に尽くした功績」）、2001年に全国ハンセン病療養所入所者協議会（「ハンセン病に対する偏見、差別と闘い、人間の尊厳を広く社会に示した功績」）がいた（同賞については朝日新聞社ホームページより。2020年3月29日閲覧）。

「神学者」はもうひとり、大城平永に会っている。大城や、ときに徳田を連れだって、「神学者」は青木の足跡をたどるべく、本部半島などあちこちを歩いた。しかし、とりわけ大城からも聞いたであろう青木についての情報や印象を、「神学者」はひとつも記録していない。同書「あとがき」に著者は、「愛楽園に行くたびに、わたしは古い入園者のかたから、たくさん話を聞きとっています。それについては、この本ではあまり多くのことを述べませんでした」と明かした。それは「たいへん長い話になってしま」うからであり、いまもこれからも、「それを正確に記述するだけの時間」がないからだという。

くりかえせば、沖縄でハンセン病施設の運営が始まったのちの青木恵哉のようすについ

では、よくわかっていない。「神学者」が編著『選ばれた島』の「解題」に記した「愛楽園設立以後」のとりわけ「著者〔青木〕にリンチを加え」たとの指摘が、なにに拠っているのか明らかではない。おそらくは訪沖時の在園者からの聞き取りに拠ったのだろう。

「神学者」は「愛楽園設立以後」の見出しのもとで（『選ばれた島』1972年版「解題」）、さきにみたとおり、上間源光が披露した青木の「述懐」をふまえたうえで、

著者〔青木〕は沖縄にライ療養所を創設するために神から選ばれ遣わされたかけがえない器であり、その使命のためだけに生きたのである。愛楽園開設後の著者の「余生」について、人は冷淡な批評をすべきでない。〔傍点は引用者による〕

と、青木を説いたり論じたりすることをめぐる制限をひとに課していたのである。青木についてひとが口を開く領域を狭めるとともに、「神学者」は青木の生を限定してしまう。それはさきにわたしが指摘した、「神学者」にとって青木は信仰に生きる「宗教的人間」でなければならなかった、との「神学者」がつくりあげる青木像とも重なる。

「神学者」はさきの引用箇所につづけて、

晩年の著者は園内では疎外された老人であり、かれを重んじる人は数人しかいなくなった。戦後、本土に渡ったとき、本土療養所で示された手厚いもてなしと尊敬を思うにつけ、愛楽園における不遇をかこつ愚痴が次第にふえた。

と、青木のみぢかにいた人びとの言をふまえたとはいえ、彼を、「不遇」を、「愚痴」る、「疎外された」、孤独な、「老人」、の型に嵌めようとし、さらにまた、「それでも」と言葉をついで、「著者には信仰者としての修練の努力があった。かれは死の床にあって『懺悔録』（アウグスティヌスの『告白』であろうか。表紙はとれ、ぼろぼろになっていたという）を音読させて聞いていた」と、あくまで「宗教的人間」として青木を死なせようとするのである。故人の遺志とはべつに、その遺稿をいわば切って捨てたといつてよい処理も「神学者」の為せる始末として一貫しているのである。

**問われる青木恵哉の報せ方** 2019年におこなわれた「第23回阿南市人権フェスティバル」で「青木恵哉パネル展」が開かれ、展示において「青木恵哉を知っていますか」と問わざるを得ないほどに知られてこなかった青木は、その展示をとおして、知られることと

なったか。くりかえせば、シートの最初にかかげられた「青木恵哉を知っていますか。／ハンセン病を知っていますか」とのふたつの問いについて、後者の「ハンセン病を知っていますか」と問われたとき、ハンセン病は [ ] という病だと知っていると言えられるていどに [ ] を埋める情報がそれらのシートには記されていた。

他方で、前者の「青木恵哉を知っていますか」との問いにたいしては、はい知っていません、青木恵哉とは [ ] というひとです、と答えるにふさわしい情報がシートにあったか。彼の略歴はわかった。では、展示を観覧したひとは、展示をとおして青木をどう知れたところとしたのか<sup>11)</sup>、そのあとでたとえば展示をみていないひとにどのように伝えるだろうか。

シート1表におおきくかかげられた問いへの回答は、たとえば、簡潔にはさきにみたシート2表にある——「青木は、自らもハンセン病を患いながら、病友たちのために療養権獲得をめざして活動し、ハンセン病療養所である「沖縄愛楽園」の基礎を築いた人です」か、または、おおまかにはシート全体が回答を示しているとなるのか。ハンセン病をめぐる沖縄の療養所の「基礎を築いた人」青木恵哉、これはよい。では、さきに疑問として示したことがら——疑問1「園外との接触」、疑問2「入所者の精神的指導者」、疑問3「暴力」、はどうか。

沖縄にハンセン病をめぐる療養所が設けられ青木恵哉がその「入所者」となって以降、また同所が厚生省の管轄となったのちに、彼に「園外との接触」があったか否かと問われれば、それは、確実にあった、とわたしは答えられる。それは、「らい予防法」が現行法として機能していた1953年以降も、あった、のである。その証左となるいくつもの記録を無視して、あるいはそれを知らずに、「園外との接触もなくなりました」と決めつけてしまえば、ハンセン病療養者青木恵哉を二重に——法と記述とにおいて、療養所内に隔離して閉じ込めてしまうこととなる。

「精神的」との形容をつけて「指導者」だったというばあい、それは、その3文字をつけずともすむ「指導者」たり得ていたときがあった、あるいは少なくとも、そうした指導

---

11) ひごろ接している大学生に講義内容への感想を聞くと、知らなかったことが知れてよかった、という言い方がとても多くかえってくる。用例用法がおかしい。

者像があり得るとの見定めがある。実際に動き回り、人びとをまえにして演説し、そのあいだに分け入ってなお説き、そうして人びとを動かして、直面している難儀を打開しているときの指導者には、「精神的」などという限定をつける必要はない。そうした行動をとり得なくなったときもなお、彼を「指導者」として讃えようとするときの言辞が、「青木が入所者の精神的指導者であったことは言うまでもありません」なのだ。また、沖縄のハンセン病をめぐる療養所における「信仰」や「指導」については、『選ばれた島』1972年版編者である「神学者」が、そこに載せた「解題」ですでに、その衰微を指摘していた。だから、「精神的」かどうかを問わず、「指導者」云云で青木を評するのであれば、その展開を明らかにしなければならないはずなのだ。そしてさらに、そうした青木にむけられた「暴力」をとらえるには、あまりに情報が少ないことを前提にしなければならないと気づくべきである。青木恵哉というハンセン病療養者の軌跡の一端をあらわした『選ばれた島』という著述の1972年版に「解題」を寄せた「神学者」は、そこには記録されなかったあれやこれやを補う情報を青木のみぢかにいたひとたち、おなじ療養所に暮らしたひとたちから聞いていながらも、彼はあえてそれらを明らかにしなかったのである。

くりかえせば、青木恵哉はその出身地である阿南でも徳島でも、これまではほとんど知られていない、知りづらいハンセン病療養者だったとみなされたからこそ、2019年「第23回阿南市人権フェスティバル」の「青木恵哉パネル展」で「青木恵哉を知っていますか」と尋ねられ、その青木を報せるきっかけとして、同展は、けしてちいさくはない意義をもったはずだ。しかし展示において、青木は、みずから「療養所の基礎を築いた」ハンセン病患者であり、療養所開設後も「精神的指導者」として輝きつづけ、しかしそれがゆえに「暴力」をうけることもあった、とその功績とそれへの称讃をのみあらわしてしまっただけは、彼がうけた「暴力」もそれゆえにいつそその「指導者」性が強まるいわば勲章として働いてしまい、彼がその「基礎を築いた」という療養所の仕組みも、そこに生じたであろう葛藤や連帯や反発や不信も疑念も信頼も、そうしたあれこれの諸相とその意味も、そしてかかる療養所を生き延びたハンセン病患者の生の内実と意味をも、わたしたちは知り損ね、きちんと考えるにいたらず、とおりの情報を入手して満足して始末がつけられてしまうことを、わたしは危惧する。

ところで、数行まえに、「その出身地である阿南でも徳島でも、これまではほとんど知られていない」とわたしが書いた青木恵哉について、べつなところで示したとおり、彼を知るための手だてがわずかではあれ、すでにわたしたちのまえにひろげられていた。

それはひとつに、『徳島新聞』紙上の連載「阿波の人」欄の第26回（1973年2月21日夕刊）にとりあげられた「青木恵哉」の記事、そしてもうひとつが、同紙連載記事「一坪の土地を 沖縄ハンセン病救済 青木恵哉の生涯 「いのち」を追って」（2001年6月14日から25日まで）。せっかく市内でのイベントとして「青木恵哉パネル展」を開くのであれば、それらの記事が掲載された地元紙の紙面をパネルにして展示すると、市共催の「啓発」事業にふさわしい品ぞろえとなったであろう。

**おわりにかえて** ここで、青木にむけられたという「暴力」にふれて、ひとまずこの稿を閉じるとしよう。すでにみたとおり、「青木恵哉パネル展」についてのファイル・シートにみえる「新しく入所してきた者の中には、愛楽園当局に不満を抱き、青木を職員の味方とみなして、青木に暴力をふるうこともありました」との記述は、『選ばれた島』1972年版収載「解題」に拠ったとみてよい。そこに記された「園当局に対して不満を抱く新入患者は、著者にリンチを加え、著者は前歯を折られることもあった」という記述の典拠は、明瞭ではない。

沖縄のハンセン病をめぐる療養所開設以後の園内での紛議や紛擾として、「一心会事件」が知られている。その記録として、古くは『命ひたすら一療養 50年史』（沖縄愛楽園入園者自治会、1989年）の「第一章 救らいの火灯る」の「13.一心会事件」があり、あたらしうくは沖縄県ハンセン病証言集編集総務局編『沖縄県ハンセン病証言集』資料編（沖縄愛楽園自治会、宮古南静園入園者自治会、2006年）と同編『沖縄県ハンセン病証言集』沖縄愛楽園編（沖縄愛楽園自治会、2007年）の刊行を経てつくられた、前掲『入門沖縄のハンセン病問題 つくられた壁を越えて』（2009年）がある。後者には、「7.入所後の青木恵哉」と題された章がおかれ、しかしそこでは、「青木恵哉は愛楽園建設の中心人物であったことは知られているが、愛楽園開園を45歳で迎えてから1969（昭和44）年、76歳で亡くなるまで青木恵哉がどのように暮らしたのかということについてはあまり知られていない。

ここでは、愛楽園開園直前から亡くなるまでの青木恵哉に焦点を当てていきたい」と冒頭に記したうえで、「愛楽園開園」「開園後の生活」「耕作地問題」「戦争」「戦争直後」「執事に叙任」の見出しのもとで記述が展開し、当該事象にかんしては、「『命ひたすら』の記述とは少し異なるが、耕作地の割り当ての差が要因であると話す。その不満が感謝組の指導者である青木にぶつけられた」と記されるにとどまり、「暴力」や「リンチ」の有無や、「ぶつけられた」「不満」の具体相まではわからない。この「一心会事件」についての論稿はおそらく、鈴木陽子「「献身的」な囲い込みに抗う入所者の闘争——一心会事件にみるハンセン病療養所の人々のそれぞれの主体性」（『地域研究』第17号、沖縄大学地域研究所、2016年3月）がただ1編あるだけとおもわれ、ただし、そこでも療養所開設後の青木への「暴力」や「リンチ」は記されていない。

青木への「暴力」や「リンチ」について充分には記されず、その存否が曖昧な出来事の記述の有無にかかわらず、上記4著——『命ひたすら』、『沖縄県ハンセン病証言集』資料編、同前沖縄愛楽園編、『入門沖縄のハンセン病問題 つくられた壁を越えて』は、彼について知ったり考えたりするときに不可欠の参考文献である。

「一心会事件」や青木への「不満」や「暴力」については、べつに考えるとしよう。

最後に、本稿執筆中の現時点での、三分割して発表する本稿シリーズ全編にわたる論点をあげておこう。その鍵言葉が、<sup>セレブ</sup>celebrity、である。本稿シリーズでとりあげるセレブは、「神学者」、「人気俳優」、「社会社説担当」、琉球王家長女、である（北条民雄をめぐっても、彼を「見出」した川端康成や、「北条民雄を偲ぶ会」に登壇した「作家」も「批評家」もまたセレブである）。いったいこのセレブたちは、ハンセン病施設にみずから出かけ、ハンセン病をめぐって、なにを知り、なにを報せようとしたのか、を問う——これが本稿シリーズの課題である。さらにあげるともうひとり、青木恵哉そのひともセレブとなった。ただしそれは、わたしたちが生きるこのいまの時代と社会において、そうなのである。べつに書いたことをここにくりかえせば<sup>12)</sup>、ハンセン病についての国立で単館の博物館にして資料館でもある唯二の施設のうちのひとつである国立ハンセン病資料館（東京都東村山市）

12) 阿部安成「人物誌を整える——ハンセン病療養者青木恵哉の描き方」（Working Paper Series No.224、滋賀大学経済学部、2015年3月）を参照（滋賀大学附属図書館ホームページ）

の展示で、その展示室1の「歴史展示／日本の政策を中心としたハンセン病をめぐる歴史」を構成する16枚のパネルに示された個人や集団のなかで、ハンセン病発症者がただひとりだけとりあげられ、それが青木恵哉なのである。なぜ唯一、彼をのみパネルに載せたのか、展示事態はそれを充分には明示してはいない。徳島で生まれ育った彼は、ハンセン病発症後にそこを離れ、熊本、香川、沖縄を暮らしの場とし、その内実はともかくもそれらの場所で療養もしたのだった。ハンセン病を対象とした隔離予防法である「癩予防ニ関スル件」（1907年公布、1909年施行）と「癩予防法」（1931年公布、施行）が現行法として機能している時代に、青木ほど長距離かつ広範囲に移動をしたハンセン病患者はいなかったことだろう。本稿でくりかえし書いてきたとおり、沖縄でハンセン病をめぐる「療養所の基礎を築いた」ことでも、彼は余人にはみられない働きをしたとあってよい。その意味でセレブとみなし得る青木恵哉が、あちこちを訪いめぐることによってなにが生じたのか、また、ハンセン病そのものとその施設である療養所とを彼がどのように生き、それをどう報せたのか、それがどう報せられたのかは、いまだ充分に考えられていないといわざるを得ない事態がつづいていると、わたしはみる。

セレブとなればそれはセレブであるがゆえに、また、展示も展示されれば展示されたがゆえに、それぞれに強い発信力を持ち、市井の人びとがハンセン病をめぐる情報や知識をかたちづくるうえで影響力をももつ。他方で、厚生労働省がつくったパンフレット「「ハンセン病の向こう側」：生徒用」（前掲）で、「学習のポイント」として示した3点のうちのひとつが「POINT1 ハンセン病に対する<sup>へんけん</sup>偏見や<sup>きべつ</sup>差別をなくすために／ハンセン病について正しい<sup>ちしき</sup>知識を持とう」との指示なのである。

わたしたちは、そこにいう「正しい知識」をどのくらい手許においているのか、いったん得たそれをわたしたちが更新したり修正したりすることは可能なのか、その普及にセレブはどういった役割を担い、どのような効果を果たすのか——こうした問いを考える素材を、本稿シリーズの全編をとおして提示するとしよう。

---

ージのリポジトリで全文ウェブ閲覧可)。